

1. コラム「論点提起」：メディアリテラシーや如何

「アメリカ国内の分断と対立」（特に、政治システム）が深刻化しているとの報道が続いている。その伝え方/伝えられ方にも分断と対立が見られる。その背景として、経済的格差・社会的階層の固定化（中間層の崩壊・二極化）が指摘されている。加えて、アメリカのプレゼンス（覇権国家）の縮退による余裕のない国家・社会に移行する歴史的な流れの中、移民問題、人種問題、宗教問題が深刻な社会課題として多様な形で励起している。「衰退・混乱・分断するアメリカ」は世界的規模での混乱、対立そして分断を誘発し、アメリカそのものが世界のリスク要因と化している。

翻って、日本はどうか。戦後の復興・高度成長期を経て、1990 年以降のバブル景気が崩壊する中、デジタル化社会への対応が遅れ、「Japan as Number One」時代は終焉した。東京一極集中構造＝東京と地方の格差の固定化、代議士の世襲化に代表される社会階層の固定化、非正規雇用で代表される経済・所得格差・雇用不安定さの固定化（少子化の原因、中間層の消失）等々、格差が発生・拡大・固定化しつつある。日本の場合は、アメリカ的な「分断」というよりも、社会的な制度設計等が変容する時代に対応しきれないという「ギャップ」「レジリエンス」の問題と云える。

社会学者の正村俊之氏 https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/22/10/22_10_98/pdf は、「格差が拡大（差異化）するだけでは、人々がバラバラになるだけである。バラバラにされた人々が、相対立する二つ（もしくは少数）のグループに集約（同質化）されたときに分断が起こる。しかも、格差が客観的な差異として存在するのに対して、分断は、意見の対立として主観的な次元で現れてくる。」「現代社会では、世代的・地域的・民族的・階層的な格差が人々の序列的な差異を生み出しているのに対して、その差異化された人々を組織化する手段の一つとなっているのがメディアである。」そして「19 世紀の時代に社会的な凝集性を高める働きを担ったのは思想やイデオロギーであったが、思想やイデオロギーの力が衰退した今日、それらの代替的な役割を担っているのが、インターネットに代表されるメディアである。」と指摘している。正鵠を射ている。

スマホの普及は、いつでも、どこでも、誰でもタイムラグなしに視聴し、発信することができるネットメディア社会をもたらした。ネットメディアの特徴として、トラッキング機能、フィルタリング機能、パーソナライゼーション機能があり、個人の関心に沿った情報に囲まれ、偏った価値観の中でしか情報／反応しか得られなくなる「フィルターバブル」「エコチェンバー」を生じさせる。フィルターバブルとは「泡の内部のように、外部と遮断された状態・区域・領域、外部で起こっていることに気付いていない、あるいは、外部から影響を受けない状態」、エコチェンバーとは「自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローする結果、意見を SNS で発信すると自分と似た意見が返ってくるという状況を反響室に例えたもの」を意味する。これらは、フェイク情報を含め、認知バイアスを生み出し、興味・行動の固定化を招来し、社会的分断を加速させる。

フィルターバブル等に陥ることなく、多様な価値観に基づくバランスのとれた情報に接することが社会的混乱・格差・分断を防ぐ第一歩ではなかろうか。メディアは単なる「情報場」としての機能を超えて、多様な空間・主体・行動をつなぎ、溶融・融合する「社会的サービス場」へと進化している。こうした意味合いを含めて、メディアリテラシーが問われているが、その対応や如何。